

日野市立日野第四中学校 令和6年度 授業改善推進プラン(理科)

1. 生徒の現状

活用した資料等	各学年の分析結果
<1年生> ・全国学力調査の結果 ・学びに向かう力等に関する意識調査 <2年生> ・学びに向かう力等に関する意識調査 <3年生> ・復習確認テスト ・授業アンケート ・全国学力調査	<1年生> ・復習確認テストの結果から、半月の名称を書く(正答率91.5%)や化石と答える(正答率93.3%)問題などの正答率が高かった。単純な現象は定着率が高い。月の形と位置の変化を選ぶ(正答率29.1%)、実験結果から気体が溶けている水溶液を選ぶ(正答率26.7%)など、複数の要素が関わり変化が起こる問題について正答率が低かった。 ・授業の内容がどのくらい分かるかという質問に対し45%がよく分かる、46%がどちらかといえばよくわかると回答している。 <2年生> ・授業の内容がどのくらい分かるかという質問に対し33%がよく分かる、50%がどちらかといえば分かると解答している。 ・学習はどのくらい得意かという質問に対しては28%が得意、47%がどちらかといえば得意と解答している。 <3年生> ・復習確認テストの結果より、「液化化現象」とは何かという問題(正答率88%)や蒸留による混合物の分離に関する問題(正答率70%)などの正答率が高かった。印象に残りやすい現象や実際に実験を行って学習したものは、定着率が高い。動かすことのできない物体のルーペによる観察の問題(正答率28%)や酸化銅の還元の実験操作に関する問題(正答率38%)などの正答率が低かった。授業で実際に実験を行っていないことや実験を行っていてもその操作の理由についての理解度が低かった。 ・授業アンケートでは、「授業の内容に興味をもって、意欲的に取り組むことができた。」という質問に「あてはまる」、「どちらかと言えばあてはまる」と回答した生徒が84%、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」と回答した生徒が15%であった。 ・全国学力調査の結果より、理科の勉強は好きですかという質問に「あてはまる」と回答した生徒が36.4%で、全国平均の33.3%よりも高かった。しかし、自然の中や日常生活、理科の授業において、理科に関する疑問を持ったり問題を見いだしたりすることがありますかという質問に「あてはまる」と回答した生徒が32.1%で、全国平均の32.5%よりも低かった。

2. 授業改善策

改善の観点	具体的な改善策
<1年生> (1) 分かりやすい授業を行う。 (2) 知識を用いた考察の方法を身につける。 <2年生> (1) より分かりやすい授業を行う。 (2) 自信をつけさせる。 <3年生> (1) 実験の操作やその理由などについての理解の向上 (2) 興味をもって意欲的に授業を受ける生徒の割合の向上	<1年生> (1) 46%の「どちらかというと分かる」と答えた生徒を、「よく分かる」にしていく。普段の実験のほかに、演示実験や生徒の身の回りの事物を用いるなど、生徒の経験と関連付けながら知識の定着を図る。 (2) 授業で学んだ基礎的な知識を用いて現象を考察する力を養う。実験を行い、実験操作の理由と、実験結果から性質などを考察する機会を多くつくる。各班で実験が行えない場合にも演示実験を行い、話し合い考察する機会をつくる。 <2年生> (1) 33%が「よく分かる」、50%が「どちらかといえば分かる」と解答していて合わせると83%が概ね授業の内容が分かっている。「どちらかというと分かる」の50%を「よく分かる」にしていく。そのためには、動画の視聴のみならず、実際に現象をみて体験させることを増やしていく。 (2) 28%が「得意」、47%が「どちらかと言えば得意」と解答していて合わせると75%が概ね得意と答えている。「どちらかといえば得意」の、47%を「得意」にしていく。そのためには自信をつけさせる必要がある。簡単な

	小テストを何度も行い、正答を繰り返させることで自信をつけさせていくようにする。 <3年生> (1) 多くの実験観察を行い実際に生徒に経験をさせる。各班で実験観察が行えない場合であっても演示実験を行い、実験の操作の理由などについてグループで話し合い考えさえる時間をつくることで、理解の定着をはかる。 (2) 授業に興味をもてない生徒は、科学そのものに興味がない生徒が多いと考えられる。現在学習している内容が日常生活のどの部分に関係しているのか、ICT等も活用し紹介することで興味関心を高める。また教科書の実験だけでなく、授業の内容に関連するものづくりなどの科学的体験も取り入れる。
--	---